日本人学習者のアラビア語の聞き取りの問題について
- /h/ と /ħ/ の問題を中心に -

Hanan Rafik Mohamed（カイロ大学）

【キーワード】 日本人アラビア語学習者、アラビア語と日本語の音声の特徴、誤りの傾向、聞き取り問題、/h/ と /ħ/、音声指導方法

１．はじめに

アラビア語と日本語は、音声的にも言語的にも非常に大きな差異を持つ言語対である（Hanan 2010, Kasim 2010）。これに加え、それぞれの言語を母語とする話者が持つ物事を考える発想、更には、コミュニケーションにおける文化的差異（Sumi and Sumi 2010, Hanan 2008, 鷲見・鷲見2009, 2010）までもが存在し、日本人学習者にとってアラビア語の習得・運用はかなりハードルが高い。

本研究では、日本人アラビア語学習者（以下「学習者」と省略）のアラビア語音声の聞き取り問題の実態を明らかにするため、Hanan (2012a,b) の調査や分析に依拠しながらも、新たな聞き分け調査にもとづいた /h/ と /ħ/ の誤用に焦点を当てその実態を示したい。最後に、学習者を対象に、/h/ と /ħ/ の効果的と考えられる音声指導方法を提案する。

２．先行研究

Kasim (2010) は音声的・形態論的・統語的・語彙的側面における日本人学生のアラビア語学習における困難点について書いている。この研究は、対照言語学の分析や学習者のアンケートの分析や指導方法の提案を中心としており、学習者の問題点についての実験調査はないが、誤用傾向についての報告はある。Kasim による学習者の音声習得についての記述は次のようにまとめられる。

A）アラビア語の母音数は少ないので、学習者にとって習得しやすい（210）。

B）十分な音声練習を受ければ、アラビア語の子音の中で /r/ と /l/ 以外は、学習者にとって大きな問題ではない。西欧人と比べると日本人の学習者の方がアラビア語の音声をよく習得している（211）。

C）アラビア語と日本語の音節構造は大きく異なる。聞き取りと発音と会話のレベルでは優秀な学習者にとってもアラビア語の音節の習得は最も困難である。アラビア語の音節の習得には時間がかなりかかる（211～213）。

D）学生のアンケート調査によると、会話や発音や読解などと比べて、アラビア語の聞

き取りの方が、より困難である（213）。

ここでの Kasim による指摘と、次の２節に要約する Hanan (2012a,b) によるアラビア語音声の聞き取り問題の考察とを比較すると、B), C), D) については一致するが、A) については、Hanan (2012a) では母音が関わる誤用が意外と多いことを指摘している。

2.1　Hanan (2012a)

Hanan (2012a) では、東京外国語大学でアラビア語を専攻する学生を対象に、2010年度から2011年度にかけて実施した聞き取りテストで明らかになった誤用を分析し、さらに /r/ と /l/ の誤用の実態を別の聞き取り調査にも依拠し提示した。まず、聞き取りテストに現れた音声の誤用結果は表1のとおりである。

順位	音声項目誤用実態	
1	r⇔l	
2	h	「語末の h の削除」、「h→ħ, f,長母音」、「語末に不要な h の添加」
3	咽頭化⇔非咽頭化	
4	母音	「語中に不要な長母音の添加」、「語末に不要な長母音の添加」 「語中の長母音の脱落」、「語末の長母音の脱落」
5	ʔ	「ʔ→ʕ, n,母音」、「語中のʔの脱落」、「語末のʔの脱落」、「語末のʔ→h」
6	ħ	ħ→h, f, x
7	ʕ	「ʕ→長音＋ʔ」、「ʕ→長音」、「ʕ の脱落」
8	q⇔k	
9	x→ħ	
10	ɣ	ɣ→ħ, x, f, j
	その他	「θ⇔s」、「θ⇔ʃ」、「ð⇔z」、「f→ʕ」

表1　音声誤用分析結果

（順位は誤用の多かった順位つまり困難さの順位を示めす）

この表は、以下に書かれている調査結果をまとめたものである

1）学習者にとっては、/r/ と /l/ の弁別の問題が最も困難で、その次は /h/ の問題である。/r/ と /l/ の問題と /h/ の問題は、Hanan (2012a) で実施した調査の総誤用数の半分ほどを占めていた。
2）学習者にとって咽頭化音と非咽頭化音の弁別は困難と考えられる。
3）日本語の母音音素と比べると、標準アラビア語の母音音素の数は少なく、/i,a,u/ の３つの短母音音素とその長母音音素のみである（Hanan 2007, Husaam 2005, Manaaf 1998 ほか）。つまり、学習者には習得しやすいと思われがちだが、母音の誤用数の順位は

４位を占めている。

4）誤用数順位から判断すると、学習者にとって軟口蓋摩擦音 /x/ と /ɣ/ の方が咽頭音 /ħ/ と /ʕ/ よりも聞き取りやすいと考えられる。

5）学習者にとってアラビア語の歯間音の聞き取りは大きな問題ではない可能性がある。

上記「2)」に関して、咽頭化とは、子音の主たる調音に加味される「第二次調音」の一種であり、調音的には奥へ引っ込められた舌根と咽頭壁との間で狭めを形成することによってつくられる（Card 1983, Hanan 2005,1990, Hanan・吉田2013(印刷中)）。咽頭化子音音素は日本語に存在しなので学習者によるアラビア語音声の習得に影響すると考えられる。

上記「3)」の母音問題に関して、この傾向は Tsukada（2009, 2010, 2011) の研究成果と一致している。Tsukada はアラビア語と日本語の長母音と短母音の知覚について書いている。Tsukada（2010）の実験結果では，日本人被験者によるアラビア語の短母音と長母音の双方に関わる誤答が見られる。長母音について、Tsukada（2009）はアラビア語の長母音の長さは日本人被験者にとって十分に長母音に足る長さとして聞こえていない可能性があり、さらに、アラビア語と日本語の音節構造の違いが日本人被験者に影響している可能性があるとしている。

要するに、アラビア語にも日本語にも長母音と短母音が存在しているからといって、学習上、アラビア語の母音問題がないといえないのである。そして、音節構造などが学習者によるアラビア語の母音習得に影響を及ぼしていると考えられる。目標言語の音声・音韻上の問題の原因を探るには、音素の対照分析のみでは充分ではなく、音節の対照分析も極めて大事である（Briere, Campbell and Soemarmo 1983、瀬田2008ほか）といわれている。

特別に行われた /r/ と /l/ の聞き取り調査の結果は、次のようにまとめられる。

1) 語頭の /l/ と語末の /r/ は学習者にとって他の所よりも聞き取りやすい可能性がある。したがって、/r/ と /l/ を練習させるときには、習得しやすい位置から始めるのがよいだろう。

2) /r/ と /l/ の正答率は最高が100％、最低が25％であった。即ち、正答率の開きが大きく、出来る学習者と出来ない学習者の差が大きい。この開きの原因を明らかにするため、学習者の学習開始年齢、学習経験などを把握することが重要である。

3) 被験者の37名の中で /r/ と /l/ の弁別が完全に出来たのは一人の学習者のみで、正答率は100% であった。さらに、27名の正答率は70％台以上であった。このことから、日本人学習者にとって /r/ と /l/ の弁別は困難であるが、学習者の努力などによって克服可能な問題であると考えられる。

2.2　Hanan (2012b)

Hanan (2012b) では、特にアラビア語と日本語の音節構造対照分析が行われ、さらに学習者の母語（日本語）を生かしたアラビア語音節構造の新しい指導方法が提案された。音節構造対照分析は次のようにまとめられる。

アラビア語の音節の型には、CV、CVV、CVC、CVVC、CVCC がある（C は子音で、V は母音）。このうち、CV、CVV、CVC は、語頭・語中・語末のどの部分にも自由に現われるが、CVVC、CVCC は語末にしか現われない（Al-Ani 1973, Aniis 1984, Hanan 2007, Higazy 1973ほか）。そして、アラビア語の音節特徴の中で学習者の音声習得上最も影響するのは、C と CC の現れ方であると考えられる。アラビア語では，日本語の促音に相当する二重子音（同じ子音の連続）の他、語中と語末の子音連続（異なる子音の連続）、語末の子音の存在が許される。それに対して日本語では，子音が連続するには先行音節の末尾子音と後行音節の頭子音が同じであること、すなわち、二重子音（促音）であるか、または先行音節の末尾子音が鼻音（撥音）に限られ、また語末に表れることができるのは鼻音のみという制約がある（Itoh 1986、佐藤1996、杉藤1989ほか）。その結果、学習者はアラビア語で子音が連続する単語や、子音で終わる単語を発音するときに、子音の後ろに不要な母音を補ってしまう傾向がある。すなわち学習者にとっては、日本語にはない、異なる子音の連続（新連続）と後ろに母音が続かない子音も習得が困難であると考えられる。

3. 調査

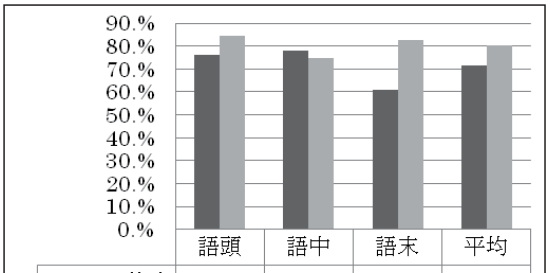
3.1　/h/ と /ħ/ の調査の項目と学習者について

/h/ と /ħ/ の聞き取りの問題について調査するために、聴解や作文の授業を利用し、2011年度末に次の聞き取りテストを行った。テストは48項目から構成される（テスト語彙リストは資料を参照のこと）。/h/ と /ħ/ の項目は同数で、語頭・語中・語末の /h/ と /ħ/ の各項目は8個ずつである。学習者に単語を聞かせ、含まれている音を /h/ と /ħ/ から選んで書かせた。学習者の合計人数は35名（1年生13名、2年生13名、3年生8名、院生1名）である。

3.2　/h/ と /ħ/ の調査の結果

2011年度末に特別に実行された /h/ と /ħ/ のテストの全体の正答率は76.07% である。/h/ と /ħ/ の正答率を図１に、正答の最低点および最高点を表2に示した。

図1



	語頭	語中	語末	平均
■h の正答率	76.07%	78.21%	60.71%	71.66%
■ħの正答率	84.28%	74.64%	82.50%	80.47%

/h/ と /ħ/ の正答率について次のようにまとめられる。

1）/ħ/ の平均正答率は /h/ の正答率よりも高い。全体的に学習者にとって前者の方が後者よりも聞き取りやすいといえる。
2）（語中の /ħ/ とは逆に、）語中の /h/ の正答率は語頭と語末の /h/ よりも高い。この１か所は学習者にとって他の2か所よりも聞き取りやすい可能性がある。
3）本調査の正答率の中で、語末の /h/ の正答率が最も低い。学習者にとって語末の /h/ はかなり習得しくい。
4）語頭と語中の /h/ の正答率は、近い値が出ているが、実は難しさが違う。語頭と語末の /ħ/ の正答率に関しても同じことがいえる。
5）語中の /ħ/ の正答率は語頭と語末の /ħ/ の正答率と比べ低い。語中の /ħ/ は学習者にとって語頭と語末の /ħ/ よりも習得しにくい可能性がある。

表2　/h/ と /ħ/ の正答の最低点 / 最高点（パーセンテージ）（差）（35名）

	h の最低点 / 最高点（差）	ħ の最低点 / 最高点（差）
語頭	25/100 (75)	50/100 (50)
語中	25/100 (75)	37.5/100 (62.5)
語末	25/100 (75)	50/100 (50)

表2から次のことがいえる。

1）/h/ の正答率は最高が100％、最低が25％で、/ħ/ の正答率は最高が100％、最低が37.5％である。即ち、正答率の開きが大きい。
2）/h/ の正答率の開きは /ħ/ の正答率の開きと比べより大きい。

各学年別の正答率と正答率ごとの人数は、図2と図3に示した。

図2

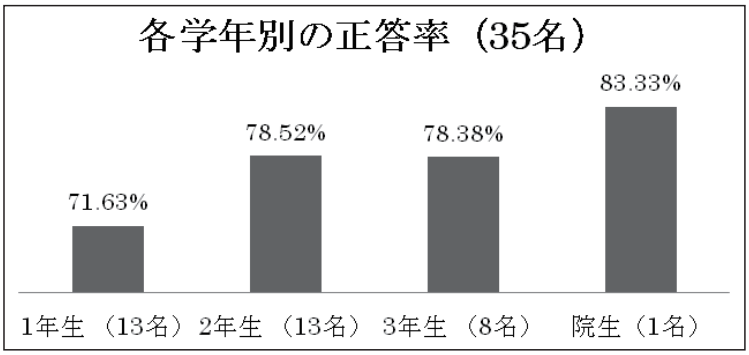
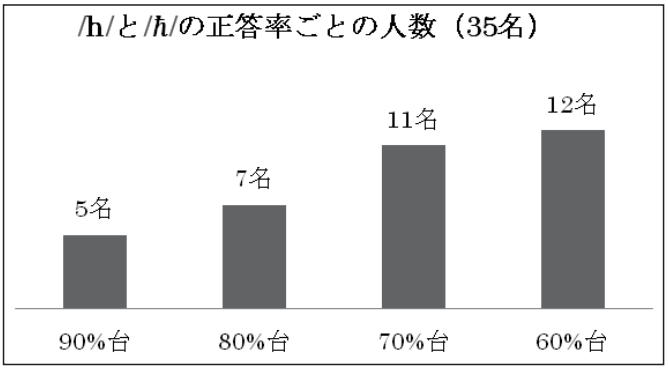


図3



各学年の正答率、正答率ごとの人数から、次のことが言える。

1）1年生の正答率は他の学年よりも低く、院生の正答率は一番高かった。即ち、学年が上がることによって正答率が上がっている。この上昇は聞き取り能力によるものなのか、習得語彙数の増加によるものなのかは分からない。

2）/h/ と /ħ/ の両方のテストで満点の学習者は一人もいない。

3）学習者35名のうち、23名は70％台と60％台の正答率であった。学習者にとって /h/ と /ħ/ の弁別が困難といえる。

/h/ と /ħ/ の正答率ごとの人数の詳細は次の通りである。

表3　/h/ と /ħ/ の正答率ごとの人数の詳細（35名）

	hの語頭＋語中＋語末の個人別正答率		ħの語頭＋語中＋語末の個人別正答率	
得点	学習者数	学習者数のパーセンテージ	学習者数	学習者数のパーセンテージ
100％台	-	-	2名	5.71%
90%台	3名	8.57%	6名	17.14%
80%台	8名	22.85%	8名	22.85%
70%台	9名	25.71%	13名	37.14%
60%台	7名	20%	6名	17.14%
50%台	7名	20%	-	-
40%台	1名	2.85%	-	-

この結果から次のことがいえる。

1）/h/ と /ħ/ の両方のテストで満点をとった学習者は一人もいなかった。しかし、/ħ/ のテスト項目のみ満点を取っている学習者が２名いた。即ち、/ħ/ は困難であるにもかかわらず、この音の完全な習得は不可能ではないことが明らかである。

2）/h/ のテスト項目の場合，１人の学習者を除いて，学習者の正答率は50％台以上であった。しかし、/ħ/ のテスト項目の場合は，全学習者の正答率は60％台以上で、70％台の学習者も13名もいた。この結果からは /h/ と /ħ/ では難しさが違い、/h/ の

聞き取りの方がより困難であることがいえる。

4．本調査の /h/ と /ħ/ の音声的特徴とその音声指導

日本人学習者に対する /h/ と /ħ/ の音声指導（発音）について考えたい。

4.１　/h/ と /ħ/ の音声特徴

/h/ は無声声門摩擦音である。一方、/ħ/ は無声咽頭摩擦音で、日本語に存在しない子音である。/ħ/ の調音は舌根が咽頭壁に接近する。このために喉頭蓋は喉頭口へ向かって押し下げられる。/ħ/ は口蓋帆が全然振動しない無声の咽頭摩擦音である。

そして、/ħ/ の方が /h/ よりも上の部分で発音され、はるかにノドの筋肉を活発に使い、咽頭をまわりの筋肉の力で締めてつくられる。きこえの面では、/ħ/ は /h/ と比べて、摩擦の喧騒性が目立つ音である (Hanan・吉田2013(印刷中))。

学習者の発音では、アラビア語の /h/ に母音 /i/ と /u/ が後続するときは、日本語の /hi/ [çi] および /hu/ [ɸɯ] になることが多く、アラビア語の /hu/ と /fu/ の弁別がなくなってしまう。つまり、日本語 /h/ の異音によって，学習者のアラビア語音声習得が影響を受けているといえる。

4.2　/h/ と /ħ/ の音声指導

学習者にアラビア語の /h/ の発音を指導する際に、まず初級段階から、自分のアラビア語音声の /h/ の問題点を意識化させ、次にアラビア語母音の音声特徴を利用する。アラビア語の母音音素レベルでは、/i/ と /e/、/u/ と /o/ の弁別はない。つまり、アラビア語では /hi/ と /he/、/hu/ と /ho/ の弁別はない。そして、学習者の誤発音を直すためには、多少母音の正確さを犠牲にし、/hi/（「ヒ」）を /he/（「ヘ」）、/hu/（「フ」）を /ho/（「ホ」）と発音するように指導し、数多く練習させる。

例

hija → heja	هي	彼女
huwa → howa	هو	彼

すなわち、以上の方法により，母語である日本語において使われている単音からアラビア語の単音に近いものを見つけ学習者に示すことによって、学習者の母語能力を生かした効率のよいアラビア語の音声学習が可能になり、学習者はアラビア語の音声に親しみをもちながら学ぶことができるのである。

/ħ/ の場合は日本語の異音レベルでも存在しない子音なので、学習者にその子音の調音点や調音方法を意識させるしかない。例えば、次の説明が効果的であると考えられる（Hanan・吉田 2013)。

/ħ/ の子音は、特徴のある摩擦音で、寒い日にかじかんだ指を暖めるために「ハーッ」と

息を吹きかける感じで、舌根を咽頭壁に近付け、収縮した咽頭を空気が通過するときに聞こえる音である。/h/ と比べて、はるかに「ノド」の筋肉を使う。咽頭をまわりの筋肉の力で締めてつくられるのであるが、できない場合は手の助けを借りて咽頭を締めてみよう。　親指と人差し指でノドボトケよりの上の部分を左右から軽くつまむようにして「ハー」と言うと、/ħ/ の音がつくられる。

/ħ/ は、/a/ と /u/ とは相性がよくて発音しやすいが、/i/ がついたときは発音が難しくなる。特に日本人は、/i/ がついた /ħ/ を発音しようとして /x/ を発音してしまうことがよくあるので注意が必要である。これを避けるためには、/i/ のついた /ħ/ を「ヒ」ではなく「ハイ」と言うような気持ちで発音すると効果がある。

最後に、学習者が発音を間違えたとき、間違えた発音を再現してから正しい発音を教える。このステップの目的は，間違いがどこにあるかをまず意識させてから、正しい発音に注意を向けさすことにある。

5. 結論

本研究の結論を次のようにまとめる。

1）日本語音声では咽頭音の /ħ/ の音素が存在しないのに、本研究の調査ではその平均正答率は声門音の /h/ の正答率よりも高い。したがって、日本人学習者にとって、/ħ/ の方が /h/ よりも聞きやすいといえる。この傾向は Hanan(2012a) の研究調査の結果と一致している。

2）/h/ と /ħ/ の両方のテストで満点をとった学習者は一人もいないが、/ħ/ のテスト項目のみ満点を取っている学習者が2名いる。このことから日本人学習者にとっては /ħ/ の完全な習得が可能であることがいえる。

3）語末の /h/ の正答率は語頭と語中の正答率と比べ、明らかに低い。学習者にとっては、単語中の /h/ 位置が「語末」「語頭」「語中」の順で聞き取りの難易度が高いことが考えられる。したがって、/h/ を練習させるときには、習得しやすい位置から（つまり、「語中」「語頭」「語末」の順で）始めるのがよいだろう。

4）語頭と語末の /ħ/ の正答率は、近い値が出ているが、実は難しさが違う。学習者を練習させるときには、習得しやすい位置から（つまり、「語頭」「語末」「語中」の順で）始めるのがよいだろう。

5）/h/ と /ħ/ の正答率の開きが大きく、さらに、/h/ の正答率の開きは /ħ/ の正答率の開きと比べると大きい。即ち、/h/ と /ħ/ の識別に関して、習得率の高い学習者と低い学習者の開きが大きいので、学習者の個別の要因を調べ、この習得率の違いの原因を明らかにする必要がある。例えば、学習者の学習開始年齢、学習経験、学習動機、

外国語の使用頻度などの要因を把握することが重要である。

6）1年生の正答率は他の学年よりも低く、2年生と3年生の正答率がほぼ同じで、院生の正答率は一番高い。なお、この傾向は玉井（2007）の研究結果と一致している。玉井（2007）は日本人学習者について「学習歴による明らかな上達が認められたのは、/h/、/ɦ/ の聞き分けのみである」と述べている（2007：20）。しかし、この上昇は習得語彙数の増加によるものかどうかを明確にするために、無意味語の調査が必要だろう。

「１）」と「２）」に関しては次のことが考えられる。日本語に /h/ が存在しているのに、なぜ学習者にとってアラビア語の /h/ の習得が困難であるかについて考えられるのは、「日本語の /h/ の異音関係」である。日本語の /hi/ [çi] および /hu/ [ɸɯ] は、学習者のアラビア語の /h/ の音声習得に悪影響を与えている可能性があるといえる。つまり、日本語とアラビア語には /h/ が音素として存在しているにもかかわらず、同音素の両言語における異音が異なるので、学習者に影響を与えていると考えられる。こうした学習者の問題は、音素レベルのみでは不充分で、異音レベルも調べる必要があることを示唆している。

さらに考えられるのは、アラビア語の音節構造が /h/ の聞き取りにも悪影響を与えていることである。第2節で述べたように、アラビア語の音節的特徴の中で学習者の音声習得に最も影響するのは、C と CC の現れ方である。なおかつ、第2節でふれたように、アラビア語の音構造は学習者のアラビア語の長母音の習得に影響している可能性がある。よって、母音と同様に、/h/ の聞き取りが音節構造の影響を受けている可能性があるといえる。

以上のように、学習者にとって /h/ の聞き取りが困難であることは明らかである。特に語末に起こる場合が困難である。/h/ の習得状況を完全に判明するためには、①日本語の異音 [çi] および [ɸɯ] が及ぼしている影響、また、②音節末の C と CC が /h/ のとき、どんな影響を及ぼしているかについて詳細な研究調査が重要である。即ち、学習者の目標言語の音声問題を調べるとき、「音素レベル・異音レベル・音節レベル」など複数レベルの対照分析が役に立つ。なおかつ、これらの各レベルの間の関係や及ぼしている影響も調べる必要がある。

「4.1」で指摘したように、きこえの面では、/ɦ/ は /h/ と比べて、摩擦の喧騒性が目立つ音である。この音声特徴（摩擦の喧騒性）は学習者の /ɦ/ の聞き取りを /h/ と比べて、容易にしている可能性がある。すなわち、目標言語の子音の音声的特徴によって学習者の音声習得の難易度が決まる。さらに、本研究では /ɦ/ は /h/ よりも早く聞き取れるようになることがわかった。これは成人になってからでも、母語にない外国語の音声の学習が可能であることを示すものである。

音声の習得においては、確かに学習者の母語の音声的特徴がプラスにもマイナスにも影響を与えている。しかし、「プラス・マイナス」の意味を考え直す必要があると思われる。つまり、学習者の母語にない音が必ずしも目標言語に悪影響を与え、存在している音が必ずしも目標言語に良い影響を与えることはないということである。皮肉にも学習者の母語に存在しているからこそ、/h/ のように難しい場合もある。反面、学習者の母語に存在していなくても、音声特徴によって音の習得の難易度が変わり、/ɦ/ のように、習得が可能な場合もあるということである。

参考文献

Al-Ani (1973)'The phonological structure of the syllable in Arabic'.American Journal of Arabic Studies 1.37-49

Aniis Ibrahim(1984) il-aswaat il-laghawiya. Makatabit il-angolo il-misiriya. Cairo

Briere Eugene J., Campbell Russell N., Soemarmo. (1983). 'A need for the syllable in contrastive analyses' . Second Language Learning Contrastive Analysis, Error Analysis, and Related Aspects. The University of Michigan Press. 63-72

Card Elizabeth Anne (1983) A phonetic and phonological study of Arabic emphasis. Ph.D.dissertation. Cornell University.U.M.I.

Hanan Rafik Mohamed（1990）「アラビア語のカイロ方言の咽頭化子音と非咽頭化子音の Phono- Laryngograph による分析」.『言語学論叢』. 筑波大学一般・応用言語学研究室9. 51-64

_____ (2005)「アラビア語の音声と日本語音声習得上の問題点」『新版日本語教育辞典』(大修館書店)、55-56

_____(2007) 「カイロ方言と東京方言の対照研究－音節の種類、音節構造、およびアクセントの観点から－」.『Dar Elibdaa Lilsahaafa wi Elnashir wi Eltawziia』 Vol. 40. 63-74,Cairo.

_____(2008)「外国語教育と異文化コミュニケーション－日本語とアラビア語の会話教育の視点から－」、『世界の日本研究2007 －コミュニケーションを考える』、国際日本文化研究センター（Japanese Studies around the World 2007: Rethinking "Communication". 2008. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies ）、73 － 84

_____(2010)「初級エジプト人日本語学習者の日本語会話の問題点」『さまざまな日本の姿を知るⅡ』、東京外国語大学、特色ＧＰ「教養日本力」高度化推進プログラム、2009年度ブックレット、24-32

_____ (2012a)「日本人学習者のアラビア語の聞き取り問題について－ /r/ と /l/ の問題を中心に－」『日本語・日本学研究　Vol.2』東京外国語大学国際日本研究センター、103-111

_____(2012b)「日本語話者へのアラビア語音声教育に関する考察」『Sahifatul　Alsun, Vol. 28, No 1』、Faculty of Al-Alson, Ain Shams University、出版予定

Hanan Rafik Mohamed・吉田昌平、『東京外国語大学のアラビア語　第二巻　発音教室』、東京外国語出版会より2013年出版決定

Higazy, Mahamd Fahimy（1978）Madikal illa ilm il-laughah. Dar il-saqafah. Cairo

Husaam El-bahnasaawi (2005) El-dirasaat il-sawtiya Inda Olamaa El-Arab wi El-daras El-sawti El-hadiis, Makatabit Zaharaa El-Sharaq, Cairo

Itoh, Junko (1986) Syllable theory in prosodic phonology. Ph.D dissertation. University of Massachussetts.

Kasim Hosam Ahmed（2010）'Difficulties of Learning Arabic for Japanese Student and Some Suggestions for Their Improvement: A Study in the Light of Contrastive Analysis and Linguistics Error Analysis'『大阪大学世界言語研究センター論集』第3号、207-245

Manaaf Mahdi Mohamed (1998) Ilim il-aswaat il-laghawiya. Word of Books, Bierut, Lebanon

佐藤ゆみ子（1996）「日本語の音節末鼻音（撥音）のモーラ性」『音声学会会報』212 号, 67-75.

杉藤美代子 (1989)「音節か拍か－長音・撥音・促音」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻（上）』, 明治書院 154-177.

Sumi Akiko M. and Sumi Katsunori (2010) 'Interest and Motivation in Arabic Language Learning: The Role of Arabic Cultural Elements',『日本人のためのアラビア語教授法の開発－アラブ文化要素の効果的な活動－』、平成19年度～平成21年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）研究課題番号19652060、25－32

玉井葉子（2007）「日本人のアラビア語の咽頭性の習得に関する考察」､2007年度卒業論文、東京外国語大学外国語学部

Tsukada Kimiko (2009) ' An acoustic comparison of vowel length contrasts in Arabic, Japanese and Thai: Durational and spectral'. International Journal on Asian Language Processing, 19 (4): 127-138. Retrieved 03 Oct. 2012 from http://colips.org/journal/volume 19/19_4_-1- Kimiko- Tsukada.pdf

_____(2010) ' Vowel Length Categorization in Arabic and Japanese: Comparison of Native Japanese and Non-native Learners' Perception'. 13th Australasian International Conference on Speech Science and Technology 14–16 December 2010 Melbourne, Australia, 126-129. Retrieved 03 Oct. 2012 from http://assta.org/sst/SST-10/SST2010/PDF/AUTHOR/ST100010.PDF

_____ (2011) ' EFFECT OF MULTI-LINGUALISM ON THE PERCEPTION OF SHORT AND LONG VOWELS IN ARABIC AND JAPANESE'. Hong Kong, 17-21 August 2011, 2034-2037. Retrieved 03 Oct. 2012 from http://www.icphs2011.hk/resources/OnlineProceedings/RegularSession/Tsukada/Tsukada.pdf

鷲見朗子・鷲見克典 (2009)「アラビア語学習者におけるアラブ文化への興味と習得内容」『日本中東学会第25回年次大会研究発表要旨集』、28－29

_____ (2010)「アラビア語の教育と学習におけるアラブ文化要素の役割－理論的見解と質的検討－」、『アラブ・イスラム研究』第8号、37－55

資料　/h/ と /ħ/ の聞き取りテストの語彙リスト

بامية	هَمَلَ	حنان
هَدَمَ	ضحك	سَاهِر
حلال	حب	سَاحِر
لَحاف	حي	هوس
وهن	سحب	هود
بيته	نصح	شهود
وجه	منهوك	شرح
كتابه	سمح	مكافح
شَبَح	نَوَحَ	نزَهَ
هَرِير	نَزَحَ	كاهل
هلَّ	حَرِير	حَمَدَ
محَرَ	سَحَر	كاحل
شَبَه	حلَّ	هَمَد
هواء	سَهَر	مَهَرَ
توحيد	موهوب	حياكة
سفينة	مرح	نَوَهَ

Listening problems of Japanese Arabic learners: With special emphasis on the issue of /h/ and /ħ/

Hanan Rafik Mohamed

Cairo University

【keyword】Japanese Arabic learners, phonetic feature of Arabic and Japanese, learners' errors, listening problems, /h/ and /ħ、effective teaching methods

In this paper, I discuss the listening problems of Japanese Arabic learners focusing on the issue of /h/ and /ħ/. First, I introduce a contrastive phonetic analysis of Arabic and Japanese. Following this, I analyze learners' errors through listening investigations. These investigations show that the most difficult problems for Japanese Arabic learners are distinguishing between /r/ and /l/, /h/ and /ħ/, and pharyngealised and non- pharyngealised sounds.

In this paper, I also explain the phonetic feature of /h/ and /ħ/, and suggest an effective teaching methods of these two consonants for Japanese Arabic learners. Concerning the distinguishing between /h/ and /ħ/, the summary of learners' errors investigations of 35 students is as follows:

1) Overall result for the test is 76.07%. The percentage of correct answers of /h/ are 71.66%, and the percentage of correct answers of /ħ/ are 80.47%. So I can say that /h/ is more difficult than /ħ/ to the Japanese learners.

2) No student could get the full mark in the overall result for the test, but 2 students got the full mark in the section of /ħ/ only. So it can be inferred that with good training Japanese learners can access to a very high level in /ħ/.

3) According to the percentage of correct answers of /h/, I can say that difficulty is directed from "word - final → word - initial → word - middle". Based on these results, I recommend starting practicing the learners from position which is easy for them. In other words, to start practicing /h/ from "word - middle → word - initial → word - final " would be effective to the Japanese learners.

4) According to the percentage of correct answers of /ħ/, I can say that the difficulty is directed from " word - middle → word - final → word - initial ". Based on these results, I recommend starting practicing the learners from position which is easy for them. In other words, to start practicing /ħ/ from " word - initial → word - final → word - middle" would be effective to the Japanese learners.

I conclude that despite the existence of /h/ in Japanese and the non-existence of /ħ/, /h/ is more difficult to the learner than /ħ/. I think that this result is due to the following reasons:

① The affection of Japanese allophone [çi] and [ɸɯ] on learners ② the affection of syllable-final C and CC appearance in Arabic. So I suggest an allophone - level and syllable - level investigations in order to make the actual situation of Japanese Arabic learns even clearer for future studies.